

北見工業大学

入試ミス調査委員会報告書

令和6年9月2日

北見工業大学入試ミス調査委員会

目次

はじめに	・・・・・・・・1
I 本事案の概要	・・・・・・・・1
II 入試ミスの検証結果	・・・・・・・・2
III 再発防止策	・・・・・・・・6
おわりに	・・・・・・・・7
参考資料	・・・・・・・・8

はじめに

本年 4 月に学外から本学担当事務に「令和 6 年度一般選抜（後期日程）の理科（物理）問題 4 において解答例に誤りがあるのではないか」とのメールがあった。これを受け、改めて理科（物理）問題 4 の採点と合否判定を行った結果、採点にミスがあり、新たに 2 名を合格者とする重大な事案（以下「本事案」）であることが判明した。

このことについて、4 月 16 日に学長が記者会見を行うとともにホームページで公表した。その後、再発防止の観点から全試験科目の全答案用紙を再点検した結果、新たな採点ミスが確認されたが、合否判定への影響はなかった。以上の経緯を踏まえ、事案の重大性を鑑み、学外の学識経験者を含む入試ミス調査委員会（以下「本委員会」）を発足させ、一連の採点ミスを調査・検証し、原因と再発防止策を報告書としてまとめることを決定し、5 月 17 日に公表した。

本委員会は、6 月から 8 月にかけて計 6 回会議を開催し、議論のまとめとして、以下、「Ⅰ 本事案の概要」「Ⅱ 入試ミスの検証結果」「Ⅲ 再発防止策」を報告する。

Ⅰ 本事案の概要

令和 6 年 4 月 11 日、大学外部の高等学校教育関係者から、令和 6 年度一般選抜（後期日程）の理科（物理）の試験問題のうち問題 4 [Ⅰ]中の空欄 v 及び [Ⅱ]中の空欄 vi において、本学ホームページ上で公開している解答例に誤りがあるのではないかと指摘を受け、当該科目の出題・点検委員が改めて確認したところ、解答例が誤答であることが判明した。具体的には空欄 v 及び空欄 vi の解答例が（コ）となっていたが、実際には（サ）が正答であり、誤った解答例を用いた採点ミスであった。これを受けて学長の指示により、直ちに全ての科目において問題と解答例に不整合はないことを確認するとともに、理科（物理）問題 4 の採点をやり直し、改めて合否判定を行った結果、新たに 2 名を一般選抜（後期日程）の合格者と判定した。

4 月 16 日には、記者会見を行うとともにホームページで入試ミスについて公表した。その後、再発防止に向けての取組の一環として、全科目の全答案用紙の採点結果を確認した。その結果、他にも採点ミスが見つかった。理科（物理）の問題 3 で、有効数字を考慮して解答する計算問題において、複数の有効数字桁数が正答となるにもかかわらず、一部の正答を減点していた。また、その他の科目を含めて、解答の見間違いや点数の集計ミス等の採点ミスも認められた。そのため、全科目において再び合否判定を行ったが、追加での合格者はなかった。

これを受けて、本学アドミッションセンター内に入試ミス調査委員会が設

置され、副学長（入試担当）を委員長とし、各教科関係者、学外有識者、事務部長を委員として、6月7日に第1回調査委員会を開催し、以降、本事案に係る出題委員及び点検委員らのヒアリングを行い、それ以外の委員にはアンケート調査を実施した。これらを基に、本事案の発生原因、出題・点検体制の課題と改善策について検討した。

II 入試ミスの検証結果

本委員会では、本事案の問題3及び4に係る物理問題出題委員、点検委員、学長点検委員、前副学長（入試担当）へのヒアリングを通じて、問題の作成と点検・修正、試験日当日の点検、採点作業の状況から入試ミス発生の要因とミスの再発防止のための課題を明らかにした。また、物理のその他の問題の出題・点検委員を含めた全学力検査実施委員に対してもアンケート調査により、当時の状況の確認や再発防止のための意見を求めた。

1. 試験問題作成、点検の実施体制

本学では一般選抜（後期日程）個別学力検査（以下、「入試」）の実施にあたり、試験問題の出題、採点等を行う、「学力検査実施委員会」を設けており、学長が委嘱する教員で組織されている。当該委員会の委員は、入試科目ごとに「出題部会」、「点検部会」、「採点部会」に所属し、それぞれの所掌する業務を行う。また、入試科目ごとに責任者（科目責任者）、各部会に責任者を置く体制としている。

今回採点ミスがあった理科（物理）については、学力検査実施委員8名のうち4名が出題部会（うち1名が科目責任者と部会の責任者を兼務）、ほかの4名が点検部会（うち1名が責任者）、採点部会は学力検査実施委員8名全員が兼務する体制としていたが、物理以外の数学及び化学と比較して委員の人数や責任者の兼務といった体制に大きな違いは確認されなかった。

また、入試問題の点検回数については、入試科目ごとに①問題完成（入稿）までに複数回行うのに加えて、②初回校、再回校の校正時、③製品納品時に行っており、また、「学長・副学長の責任において実施する点検」（以下、学長点検）として学力検査実施委員会委員以外の第三者的立場の教員に初回校に対して点検を委嘱しており、他大学と比較して十分な点検と思われる。

2. 採点ミスの内容

2-1 理科（物理）問題4について

初回校点検時に当該問題担当の点検委員の意見により、解答の選択肢を追

加することになった。それにより、正答が（コ）から（サ）に変更になった。科目全体の解答例の作成を担当する科目責任者が後で修正作業をすることにしていたが、失念した。また、解答例が未修正であることに物理の学力検査実施委員は誰も気づかなかった。

ヒアリング調査の結果から

物理の出題委員が担当問題の解答例・解法を作成し、科目責任者がそれらを取りまとめて科目全体の解答例・解法用紙を作成していた。採点日まで、各出題委員・点検委員はチェックすることはなかった。また、採点開始時に、解答例の正誤を確認しなかった。

さらに、試験実施中、出題委員は受験生からの質問対応のため別室で待機していたが、最終点検との認識ではなかったため、改めて問題を解くことはしていなかった。

アンケート調査の結果から

科目全体の解答例・解法用紙の完成後から採点日まで点検は行われなかった。

2-2 理科（物理）問題3について

試験実施中に受験生からの質問を受けた際に、当時の副学長（入試担当）が科目責任者（兼当該問題出題委員）に対して、教科書に基づいて、複数の有効数字桁数が正答となることを指摘した。また採点時に物理採点委員全員で確認するよう指示した。しかし、実際には本件について採点委員間で十分な議論はなされず、科目責任者の意向で一部の解答を減点した。科目責任者は、副学長の指示とは異なる採点方針を取ったにもかかわらず、採点方針の変更を副学長に報告すべきとの認識がなく、報告しなかった。

ヒアリング調査の結果から

物理採点委員全体での議論に関して、

- ・採点委員間で教科書の内容を確認した上で議論し、単一の有効数字桁数のみを正解とし、その他の桁表記は減点にする方針となった。

との回答もあった一方で、

- ・当該問題の採点委員が判断するものと考えた。
- ・方針に疑義があったが、入試業務の経験の長い人に対して、反対し難かった。

との回答もあった。

アンケート調査の結果から

採点前の議論について、採点委員間で認識に差があることが判明した。

- ・全員で検討し、方針を決めたという過程は記憶にあるが、その際の議論の具体的な内容については記憶が曖昧。しかし、十分に時間をかけて議論をしたわけではなかった。

- ・具体的な内容を十分な時間をかけて議論をしたことではないと思う。
- ・議論したが、有効数字 2 桁のみを正答とするという理解ではなかった。

との回答も寄せられた。

また、その他にも

- ・時間をかけて作成・点検してきた問題が正しいという思い込みが原因ではないか。
- ・有効数字の桁数の取り扱いについては、テキストによって取り扱いが微妙に異なる。
- ・正答の有効数字の件については、採点委員全体で共有できていなかったことが重大なミスに繋がったものと思う。

との回答もあった。

他の科目の学力検査委員からの回答では、

- ・問題を眺めたとき、「これ大丈夫なの？」と思った。
- ・試験中の副学長と物理科目責任者とのやり取りを耳にした。採点時には配慮した対応が必要と思った。
- ・有効数字の取り扱いについて何か問題があったんだなという認識はあった。ただし、我々に直接話を振られていたわけではないので、きちんとフォロー出来ていなかった。

以上のように回答があった。

2-3 物理問題 3 および問題 4 以外の採点ミスについて

短時間での採点作業が求められる中、ダブルチェックをしたのにもかかわらず、見間違い等があったものである。

アンケート調査の結果から

- ・時間的余裕が欲しい。一旦採点作業を行った後、連続的に点検に入るが、作業を急ぐあまり、間違いを前提としたチェックになっていなかった。
- ・時間のない中での作業なので、一度時間をあけて、フレッシュな状態で点検したい。
- ・見間違いを減らすために、問題の主採点委員の方に加えて、(解答を見慣れていない) 別の採点委員の確認が有効かもしれない。
- ・点数の入力作業については、一度やってみてよかったと思ったのは、問題用

紙をめくる人、点数を読み上げる人、点数を入力する人、画面上の点数を確認する人、の4人体制で行ったこと。

3. 入試ミスの発生原因

3-1 物理 問題4について

理科（物理）問題4では、初回校点検時に当該問題担当の点検委員の意見により、解答の選択肢を追加することになった。それにより、正答が（コ）から（サ）に変更になったが、その場に科目全体の解答例がまとめられていた用紙がなかったため、作成を担当する科目責任者が後で修正作業をすることにしたが、失念した。また、解答例の点検が行われなかった。採点時にも当該問題の採点委員は、解答例が修正済みと信じて疑わず、改めて解答例の正誤を点検しなかったため、未修正であることに気づかず、誤答が記載された状態の解答例に基づいて採点した。すなわち、回数的には十分と思われる問題の点検を行っていたにもかかわらず、解法や解答例の点検が行われていなかったことがミス発生の原因であり、次回以降、必ず点検プロセスに加えられるべき点である。また、試験実施中に別室で待機していた出題委員により他の科目と同様に最終点検が行われていれば、誤った解答例に気付くことができた可能性がある。しかし、委員は受験生からの質問対応を業務とし、最終点検が必須にはなっていない点も改善の余地がある。

3-2 物理 問題3について

計算問題の解答における有効数字桁数については、あえて有効数字を意識して解答させるならば、思い込みで判断せず、最新の複数の教科書で予め有効桁数の記述を確認すべきであった。

また、採点開始前に解答例に疑義が指摘された場合、採点委員全員で十分に議論して方針を決めることが重要だが、ヒアリング、アンケート等の回答から、不十分であったと判断される。科目責任者が当該問題の出題委員でもあったことから、最終判断に客観性が欠けていた可能性があった。また入試業務担当経験の浅い委員は異議を申し立て難しく感じており、物理の学力検査実施委員会としての適切なコミュニケーションがとれていなかったと推察される。

加えて、科目責任者は、問題を指摘した副学長に対し、指示と異なる方針で採点を行ったことを伝えるべきであったが、その認識が欠如していた。

さらに、当該年度だけでなく、物理では最近の慣例として、問題の出題・点検を務めた2人が採点委員となり、担当する問題を採点する体制がとられていた。この2人が最も問題を熟知する委員であるとも言えるが、問題ごとの縦割り体制となり、他の問題にはほとんど関与せず、重要な点についても委員全員での

議論とはならなかったと考えられる。この点は、例えば化学では、問題ごとの担当を決めずにランダムに採点作業を行い、別解があった場合は、自ずと採点委員全体での議論ができる体制であったことと大きく異なる。その結果、アンケートの回答にあったように、物理の採点においては、当該問題の出題委員の意向を最優先させる慣例に倣い、その他の委員は「担当者が適切に対応するだろう」という意識で、全体としての最終的な結論が曖昧なまま、各々の担当問題の採点作業に取り組む結果となっていた。さらに、数学・化学の学力検査実施委員の回答からも、「疑問に感じたが自分の担当ではない」という意識が伝わってきた。結果的に今回は全科目の総点検にまで発展しており、入試ミスが発生すれば、決して無関係とはなり得ない。厳しい表現ではあるが、担当の問題（科目）以外への無関心・当事者意識の欠如も遠因と言える。

全体として、「仲間への信頼」の裏返しとも言えるが、「正しく対処しているはずだ」との思い込みがあったともいえる。間違いが起こり得るが故に点検作業を繰り返しているのであり、緊張感が欠如していたと言わざるを得ない。

Ⅲ 再発防止策

アンケートやヒアリング調査の結果、また委員会での議論を踏まえ、以下のプロセスが再発防止に有効と考える。新規な項目やこれまでも実施はされていたが明確化されていなかった項目に下線を付している。

入試業務開始時：学力検査実施委員会委員長が過去の入試ミスについて資料を用いて各委員の入試ミスに対する常識を共有すると共に防止意識を高める。

初稿提出前：最新の教科書における関連項目の記載を確認する。最初に出題部会と点検部会は別の部屋でそれぞれ独立して作業を行う。その後、合同作業を行うこととする。

初稿提出後から試験当日まで：初回校、再回校、納品時の点検を行う。

各科目の解法と解答例についても点検を行う。

学長点検委員による初回校点検後、指摘箇所の修正状態を確認する。

試験実施中：出題委員のみならず、点検委員も待機し、問題の最終点検を行う。

また、採点作業に向けて別解の可能性について議論する時間を確保する。正答率についても予想しておき、採点の打ち合わせを行う。

試験実施を担当する入学者選抜委員（出題・点検業務に携わっていない教員）も初見により、試験問題の不備の有無等を点検する。

受験生からの質問があった場合は、内容について、科目を問わず情報共有する。

試験終了直後：第三者による点検を実施する。

採点開始から終了まで：学力検査実施委員会委員長が「採点に疑義が生じた場合

は、徹底的に議論する」よう依頼する。また、科目責任者に対して、「些細なことでも気になることがあれば自由に誰に対しても遠慮なく発言できる雰囲気」をつくるよう指示する。

解法・解答例の内容を確認し、別解について議論する。必要に応じて採点委員全体で議論する。問題ごとに採点委員を決めている場合は、担当者によるダブルチェック後、別の採点委員が採点の正誤をトリプルチェックし、ケアレスミスの防止に努める。

その後：3月下旬に採点委員により、全答案の再点検を行う。

問題と解答例を速やかにホームページに掲載する。

なお、本委員会設置時に、本年度の入試業務が既に始まっていたことから、本調査委員会の報告を待たず、学力検査実施委員には、以下について予め申し入れている。

- ・出題部会と点検部会は別の空間でそれぞれ作業を行う
- ・計算問題において、正答の有効数字の桁数が一つであるかを確認する。
- ・解答例・解法についても点検を行う。

今回、主に理科（物理）において問題が生じたが、本学の入試科目の変更に伴い、令和8年度入試から個別学力検査は数学一科目のみに変更することが決まっている。本来委員の選出に関しても改善策が講じられるべきところではあるが、理科（物理・化学）については、令和7年度入試が最後となり、既に委員が任命され問題作成に着手されているところであるため、その点の対象外として、問題作成と点検方法の改善、ならびに試験実施中・後の点検の強化を提案した。今後は、本報告で示した対策を着実に実行すると共に、入試の実施体制の改善を不断に検討していくことが必要である。

おわりに

本学では過去に平成22年度一般入試個別学力検査（後期日程）における理科（物理）の出題ミス、平成23年度一般入試個別学力検査（後期日程）追試験における数学の出題ミス、と2年続けての入試ミスがあったにもかかわらず、時間と共に風化し、入試ミスへの注意喚起が不十分になっていた。本来であれば、毎年、入試業務開始時に過去の教訓を活かすための取組がなされるべきであった。

後期日程個別学力検査の科目変更に伴い、理科の出題は今年度が最後となるが、今回の検証結果に基づく再発防止策の確実な施行が重要である。

参考資料

北見工業大学アドミッションセンター入試ミス調査委員会について

1 設置

令和6年度一般選抜後期日程個別学力検査において確認された採点ミスについて、再発を防止するため、北見工業大学アドミッションセンターに入試ミス調査委員会を置く。

2 業務

(1) 入試ミスの原因究明

採点ミスの要因を検証の上、入試ミスに係る報告書を作成し、学長へ報告する。

(2) 再発防止策（案）の作成

問題作成等（作成、点検、採点）の実施体制、実施方法の見直しを図り、再発防止策（案）を作成し、アドミッションセンターへ報告する。

3 組織

入試ミス調査委員会は、アドミッションセンター長の指名により、次に掲げる委員で組織する。

職名等	氏名	備考
副学長 (入試・広報担当)	川村 みどり	入学者選抜委員会委員長 アドミッションセンター兼任教員
工学部 社会環境系・教授	八久保 晶 弘	「物理」科目担当教員
工学部 社会環境系・教授	南 尚 嗣	学力検査実施委員会（化学） 経験者
工学部 基礎教育系・教授	澤 田 宙 広	学力検査実施委員会（数学） 経験者
事務部長	奥 山 敏 之	
北海道大学大学院 工学研究院・教授	菊 地 竜 也	外部有識者

委員会開催日

第1回 令和6年6月7日

第2回 令和6年7月2日

第3回 令和6年7月8日

第4回 令和6年7月16日

第5回 令和6年7月17日

第6回 令和6年8月8日

第7回 令和6年8月27日～9月2日

(メール審議)